

## 脊髄損傷者の行動変容に結びついた関わりの検証

馬場敦子 木村友子 高橋麻子  
平林盛義 柴澤 忠  
一般財団法人宮城労災特別介護施設

### I はじめに

A 施設は労働災害による重度障害を持つ方の入居型自立支援施設である。車椅子を使用する入居者は9割を超え、その中の約1割が施設内で履物を履く習慣がなくその半数が足部に難治性の傷を持っていた。今回、靴を履く必要性を理解し受け入れた1症例についての関わりを報告する。

### II 研究目的

靴を履く習慣がなく足部に傷を繰り返す入居者の行動変容に結びついた関わりを検証する。

### III 事例紹介

70代女性 昭和54年交通事故により受傷(第7胸髄以下の完全麻痺)する。平成23年施設へ入居。屋内で靴を履く習慣がなく左足外側2か所難治性の傷があり再発を繰り返していた。

### IV 実施及び結果

本人が靴を履く事を拒む理由は4点あった。傷の原因を明確にするために本人と共に車椅子乗車時の足底圧の測定、乗車姿勢を姿勢鏡で確認した。その結果、膝の広がりがあるため足部が内反していることを本人が自覚できた。フットサポートの幅が狭く、踵がずり落ち足の外側で体重を受けていたため保護クッションを取り付けた。靴を履く事で足底の保護と安定を図り、膝ベルトを使用し乗車姿勢を矯正する事で足底圧の減少が見られ、足部の傷は完治し再発はない。

### V 考察

言葉だけの説明では自身の問題として受け入れ出来なかったが、本人と一緒に「見る」事で自分の問題として認知し行動を変える事ができた。

また、共に考える事で傷の再発防止に積極的に取り組み行動を維持している。傷の再発を繰り返す者は「治らない」「時間がかかる」と諦めの感情を持つことが多く「自身の行動を変えれば良くなる」と成功体験に繋がるような感情の変化を促す働きかけが重要である。

今回の取り組みの中で、他入居者と積極的に情報交換する姿が見られ、同じ経験をした者が問題を共有する事でより良い解決策を求める行動が取れたと考える。この事から、行動変容のためには他入居者、専門業者、医師等、多職種の知識を併せた関わりが重要である。